



柿と栗との話 (お伽庶物談)

なにがし

柿の實を示して

「皆さんこれは何ですか？」

「此色は何色ですか？」

「之を食べるときは何うして食べますか？」

「中には何んなものがありますか？」

「種子は何んなに並んで居るか見たことありますか？」

「切つて見せませうか」と二つに横断して見せる。

次に栗の實を示して

「これは何んですか？」

「此とげのある皮をむくと何が出ますか？」(出して見せる)

「此皮をまたむくと何がありますか？」(出して見せる)

「此皮をまたむくと何がありますか？」(出して見せる)

「此しぶ皮の中には何がありますか？」(同)  
 「何うして食べますか？」  
 など問答しながら次の話に進む。

或日のこと山の中で柿の實と栗の實とが出遇ひました。

栗はいが／＼の外套を着て居るので誰れもうつかり傍へよる人がありませんから大威張で

柿「柿さん、今日は大分霜が降りて来て寒いね。ソレソウト柿さん、お前は何時も真赤な顔をして居るではないか、何うかしたのかね」と云ふと

柿「ヤア、栗さん、相變らず元氣がいゝね、僕もお蔭様でね、至極達者だがね、困ることに僕らは君の様に外套がないので烏や鳶がいたづらをして仕様がな。夫れにだん／＼寒くなるのに僕は皮一枚だから寒くて仕方がない。」とこぼして居ました。スルト栗は

栗「柿さんそんなにこぼしたまふな。僕には僕だけにつまらないことがある。君は皮一枚取れば直ぐ食べられるけれど僕などは外套を取られて

着物を取られて、おまけに釜うでにされるのだから堪まらないぢやないか、いのちも何もあつたものではないよ。それだから僕などは一つ切らない大事な芽を煮られてしまつて、もう生へることが出来ない。君などはいくら食べられても種子が澤山残つてそして何時でも生へることが出来るぢやないか」

と云はれましたので柿もなるほどそうだと感心しました。

本號にか伽話を充分に入れることが出来ませんで讀者諸君に何とも申譯が御座いませぬ。次號に於て大に埋め合せを致しますれば夫れにて御赦しあらんことを願ひます。